

5. 3 憲法集会・品川正治さんの講演内容

東大入学時に大学生の徴兵召集猶予の制度がなくなって、いつ自分も徴兵されて戦死するかもわからないという時代だった。そこで救いをカントに求めた。その理由は「この国は国家としての理性を失っている」という思いと同時に「国民として正しい死に方は何か」と考えたからです。この2つの命題を会得してから死にたいと思いました。と、学生時代を振り返った品川さんは徴兵されて鳥取の連隊に配属されました。その時、大きなショックを受けました。非常召集され、入隊した240名が整列すると、すでに整列した3000人の将兵に向って、連隊長が、「現役兵の顔をよく覚えておけ。この男たちをよく覚えておけ。この者たちは死に行くのだ。いじめたり殴ったりする将兵はたちどころに処分する」と言われた。戦死は覚悟していたが、実際に言われると本当に驚いた。2週間の訓練後、中国の北市に2等兵としての弾投の投使として、身体に12個の手榴弾を巻きつけて戦う任務だった。延安に近いところで戦い、激しい戦闘を経験しました。日本軍が死守した山で白兵戦を2度戦い、迫撃砲を受けて右足に傷を負い倒れて数時間意識を失ったこともある。しかし、このような戦争体験をはっきりと経験した男だが、こんな話は80歳になるまで口外したことがなかった。できなかった。それは戦後、周りには戦地に行っていた人ばかりだが、ニューギニア、フィリピンのレイテ、ビルマのインパウルなど、ほとんどの人は戦死者の7割が餓死している。敵の弾に当たった人は2割だ。餓死は想像できないくらい辛いものだと思う。食べる体力をマラリアでなくして、もう動けないとその場にうずくまるのが南方での戦死の実態だ。分かれた場所が戦死とするのが内規でした。だから、遺骨もわからない。自分も戦争を体験したなどと言えなかった。また、いつ玉砕するかもわからない思いで戦争に臨んだ人のことを思うとおこがましくて言えないと思った。しかし、言えない本当の理由は深いところにあります。東大のオキヤ先生が本当の戦争体験を記録する仕事をされているが、「それは無理だ」と申し上げている。それは、「そんな戦場からどうしてあなたは助かったんですか？」と問われると、話せなくなって、支離滅裂になる。それがトラウマになっていることであり、その人たちに本当のことを話せと言っても無理だ。本当の戦場体験を持っている人は言えない。戦争一般は語れなくても、自分の戦争体験は語れない。自分にも体験がある。自分も死ぬのではないかと思える経験をした。自分の壕から近いところに戦友がいた。その男が「やられた、助けてくれ」「品川、品川……」と連呼していた。飛び出そうとした自分を抑えてくれたのがもう一人の戦友だった。馬乗りになって首を振って、「今行くとお前も死ぬ」と止められた。なぜ、あの男を助けられなかったのがトラウマとなった。しかし、戦後、東大生として下宿にいると島根県から戦死した戦友の母親が訪ねてきた。戦友の村は総出で私を探して、居場所を突き止めたらしい。列車に乗ることさえ困難だった。母親から「息子の最後をお話してください」と言われ、私は面を上げられなかった。村の人たちが全部調べてくれて、「どうぞお話してください」と言われた時、本当につらかった。講演会で戦争の話をして、自分の戦争体験は話さなか

った。しかし、昨年、松江で講演会に招かれた。しかし、主催の方から「山奥からバス3台で来られる団体があるが心当たりはありませんか」と問われ、私は「戦友の部落のご一族」あることを確信しました。私は手をついて謝りました。会場全体が泣き出し、主催者の方が休憩を、とメモを渡されたが話を続けました。その時にトラウマが消えて、苦しさが消えました。戦争体験を話す際に、現実の戦闘体験を話すことは辛かったのですが、今話すことが必要と思った。86歳になりますが、本当の戦争体験を持つ最後の世代です。私の弟たちもいますが、皆、本土防衛は経験していても戦地には行ってない。一人でも多くの人に本当の戦争体験を話したほうがいいと思ったのです。自分は哲学青年でした。国家が戦争をしているときに、自分は如何に生きればいいのか考えた人生でした。戦争を経験し、憲法9条を知った男として、国家が起こした戦争に対して、国民の生き方を訪ねていたが、哲学青年として、なんと愚問を發したのか。抽象的な国家が起こすのではない。どう考えたか。戦争を起こしたのも人間、それを止めるのも人間、それができるのも人間です。それを訪ねるべきではなかったか。戦争は天変地異ではない。戦争を起こそうとする人がいる。あなたはどっちなのか座標軸を持ってほしいのです。当時の私の物事の捉え方は間違っていた。今は戦争をしようとしているのは誰か、それを止められるのは誰かを皆が知っている。今、申し上げなければ時期を失ってしまう。今回のテーマは戦争・人間・そして憲法9条だが、大きな意味を持っています。戦争を起こすのも人間、止めるのも人間。これが言いたいことの一つです。現在の憲法と初めて出会ったのは復員船中で、山口県の先崎という港でした。上海から復員しました。そこで3日間停泊しました。そこで、各中隊に民家から借りてきた新聞が配られました。その新聞に新日本国憲法草案が掲載されていました。中隊長に言われ、みんなに聞こえるように大きな声で読みはじめて、9条2項まで読んで、陸海空軍の武力をもたず。戦争を放棄するという記述に全員が泣きました。われわれのこれからの生き方は贖罪も含めて、2度と戦争はすまいと思っていましたから、これで死んだ戦友の霊も浮かべられると思いました。殺した中国の人たちにも贖罪できると思いました。ありがたいと思いました。しかし、国民の大半はその気持ちを受け取っていたが、戦中戦後の支配階級の人達は2度と戦争はしたくない、と決心したことがないのです。国民と支配階級の人たちの乖離は大きい。あの憲法を変えて、戦争のできる国にすることは国民感情から言って無理です。だから、解釈改憲で、自衛隊とつくり海外に派兵するところまで来てしまった。有事法制をつくり、特別措置法をつくり、ついにイラクに陸上自衛隊、ソマリアに海上自衛隊を派遣してしまいました。海外の派遣までしました。9条2項はボロボロです。私たちが泣いて受け取った旗ではないのです。それでも国民はボロボロになっても9条の旗竿を離さずにいます。それが憲法9条をめぐる情勢です。さすが日本という思いと同時に今の状況はなぜこんなにねじれた状態になっているのか、という両方の思いがあります。9条に関しては最初の攻撃は押し付け憲法という攻撃です。確かにGHQの民政局が2週間で作った条文です。しかし、これは国会でも十分に議論された。支配階級の人達はたとえば憲法学者の京大の佐々木、東大の南原さんというような人や当

時の貴族院でも一度も論議されてない形になっている。なぜか？成文憲法は国家の目でしか書けないのです。戦争を国家と国家との関係でしか見ることができないのです。憲法は60年の間に、意味が変わってきてしまいました。戦争を人間の目を見て、人を殺さないとかやれない戦争をしないという憲法になりました。これはものすごいことです。世界の国際会議、世界平和のため、戦争防止のためと各国の元首は主張するが、戦争をどう防止するかを正文憲法という形で持っているのは日本だけです。コスタリカやその他25ヵ国が軍隊を持たないとしています、それは国益上常備軍を持たないということです。日本だけは、戦争は人として許されないという理論を60年の間に守って身につけました。今の戦争は昔と違います。ミサイルや高性能の爆弾を使います。アメリカに至っては無人飛行機で空爆しています。必ず母親が死にます。子どもが死にます。そんなことは例え国連が命じようと日本は戦争をしないとしています。日本だけが人間の目で戦争はやれないと決めている国です。9条2項はボロボロですが、60年間、1人の外国人も自衛隊員も殺してないのです。今更それを外せるか。それが私の人間という意味での非常に大きなウエイトです。国連といえども、国家間の条約です。だから、戦争というものを国家間の目でしか見ないのです。国連軍もあります。日本ははっきりと否定しています。人間としての憲法を持っている日本の9条を守ってほしいそういう決意を示しています。岡山の皆さんにお話しできることは喜びです。そこで、戦争を人間の目で見ることのできる日本が、なぜ、経済を人間の目で見ることができないのか？人間の目で見ることのできる経済にしたいと思います。ところが、日本と世界の経済は国家の目でさえ見えない経済になっています。金融資本のルールに従う経済になっています。会社でさえ商品になっています。新日鉄でさえ買収におびえる経済になっています。私の主人は鉄を作っているとか、旋盤を作っています。そういうことが言えなくなっています。今は効率が良いか、利益率が高いかという判断がされる社会になっています。こんな形、これが構造改革と言われ、竹中構造改革の中で変わってしまいました。急速に変わってきました。国家の目でさえ見えないあり方が当たり前になっている。内心、^{とくど}忸怩たる思いがある。損保の会社の会長、或いは社長をしています。全国中に社会のセイフティーネットという思いもあってやってきたが、効率が悪いと言われ、利益率が問題とされてきました。配当ができないから、利益が出ないと言われてきた。改革なくして成長なしは大企業のためだった。深い傷を負ったのは雇用の規制緩和です。関係者の人がいればお詫びしますが、2008年9月15日にリーマンブラザーズの破綻で社会が傾きました。神風が吹いたと思っています。あのままアメリカの経済・金融資本が続いていたら、もう取り返しがつかない経済システムになっていた。実態がボロボロ出てきて、そこで同じ年の日比谷の派遣村の事件。事件は変ですが、日比谷でしたことは、湯浅氏は戦略眼があった。あれは隅田川でしたのではないのです。国会とか最高裁判、中央官庁のど真ん中でしたのです。だから厚労省は講堂を解放せざるを得なかった。国民が状況をつくれることをはっきりと示した。これは弱い人にしわ寄せする資本主義を考えざるを得ないところに追い込みました。しかし、現実の姿はまだです。

早い話が、成長・国際競争力という成長の呪縛にとらわれている。民主党は早い段階から批判されていました。成長戦略がないと。競争とか成長にとらわれているのは問題。どの国が好きですかと聞かれて、あの国は成長戦略があるからという人はいません。成長にとられるから消費税というものが出てくる。日本の国債発行高はべらぼうなものになっています。今度破たんした、ギリシャやポルトガル、スペインと比較しても国債の発行額は大きい。対GDPの国債割合も大きい。しかし、外国から借りているのではなくて、中国や韓国ではないのです。国民から借りています。誰のためか、企業のお金を移すためです。個人の家計部門の金は1500兆円であり、個人のお金、企業の移すために、一度国債という形で国が借りています。それで財政当局は困り始めた。予算が組めないのです。財政難と称して、また個人の家計部門からお金に借りようとしている。消費税、年金を下げる。健康保険を下げる。預金の利息を減らす。企業の負担をかけないで、個人に負担をかけようとしている。一方で企業はいざなぎ景気といわれるほど、2007年までの間に最大の利益を蓄えている。個人は実質所得が減り、消費を減らしている。企業はそれでも法人税を下げろと言い、政府は分かりましたと言っている。怒るのが当たり前です。これはマスコミが悪い。マスコミは日本とアメリカは価値観が一緒だと言いつけてきました。そのために、今のような問題に関しても、国民の運動にまでさせないのがマスコミであり、本当のことを書かないのです。普天間の問題にしても国民の立場で取り上げれば、大問題になるところをそうさせないようにしてきた。政治と金の問題にすり替えて、普天間の問題も鳩山首相が続くのか、という問題にすり替えた。最初に朝日新聞あたりが鳩山頑張れと思い切って書けば、今は全く違った格好になっていたと思う。不正が起これば日本は燃えるのです。なぜそうしないのかが問題。マスコミが本当のことを書くまで、私は叫び続ける。財政問題ではどうして嘘を書くのか。騙すのです。報道の嘘ではなく、問題をそらせています。一人ひとりが主権者として、その憲法のもとで生きて生活しています。私たちは主権者です。豊田障一郎さんも一票、皆さん方も一票です。そういう自覚を持っていただくことです。そうすれば日本は変わる。日本が変わればアメリカが変わる。世界史が変わります。日本の有権者一人一人がそういう位置に立っています。是非、自覚してほしい。参議院選挙も地方選挙も。戦争を起こすのが人間ならそれを止めるのも人間。という自覚。私は主権者だという自覚を持っていただければ、憲法記念日に憲法の話をするのができるとことが最大の喜びです。